

<実践報告>

子どもの心によりそった指導はどうあったらよいか  
—見方や考え方, 感じ方を見返すことを通して—

清水 彰 長野県総合教育センター

Some Proposals for the Problems of School Truancy  
—From the Viewpoint of the Student-oriented Treatments—

SHIMIZU Akira : Nagano Prefectural Comprehensive Education Center

研究の目的	生徒指導が生きる授業のあり方を検討する
キーワード	視点の転換 セアッテック・ポール 教育臨床学 天下悉異相異質
実践の内容	授業の見返しと不登校児童・生徒との教育相談
実践者名	清水 彰
対象者	中学生
実践期間	1993年4月～1994年3月
実践研究の方法と経過	子どもの心によりそった指導のあり方について, おのれ自身の見方や考え方, 感じ方を, それまでの実践や文献, 相談事例から見返した.
実践から得られた知見・提言	私には, 児童生徒の示す事実に対して, 思い過ぎや見落とし, 押しつけ, 無頓着さなど不十分な部分が多いことが改めてわかった. そして, 今まで気づかずに無関心でいたこれらの部分に気づけるようになってきた. 生徒指導の力をつけることは, 「人間性を磨く」ことでもある, という言葉を実感した.

## 1. はじめに(テーマを決めたわけ)

かつて、「学び手の心に寄りそって」というテーマで授業研究をすすめたことがある(信州大学教育学部附属長野中学校教育研究会, 1989)。「学び手の心に寄りそった」授業とは、もとよりその子の恣意的な行動や我儘を認めていこうとするものでない、ということをもまえ、一時間一時間の授業を通して、「子どもの把握はどうであるか、発問や助言が子どもの心に響いているのか、発言内容の取り上げは機を得て的確であるのか、一人の子どもに寄せての教材化に無理はないのか。」という視点で、厳しく見返しをし、授業を見る目を養い、授業を改善する力をつけながら、生徒と共に作り上げる営みであると考えた。そして、教師の子どもに対する思い過ごし、見落とし、押しつけ、無頓着さなどが、子どもの学習意欲や学習活動の妨げになっていることに気づかされた。「学び手の心に寄りそって」とは、私自身が己れのうちに厳しく向ける目の問題であり、その確かさであることも学んできた。その上、「学び手の心に寄りそう」ことは教育の理念であり、また、私自身の力量が問われる教師としての永遠のテーマあることも同時に学んだ。具体的な手立てとしては、その子の「よさ」を生かしたり、伸ばしたりするような授業づくりをすることが、即ち、「学び手の心に寄りそう」授業であることがわかってきたが、私自身に突き付けられたものは大きかった。

一時間の授業が終わったときに感じるなんとも表現しようのない不満足さや物足りなさが、以前より増して残るようになってきていたのである。生徒たちの「よさ」を生かそうとした授業をしても、そこには発言できなかった子どもや、そっぽをむいていた子ども、表情のなかった子どもなど、真に楽しく日々の学習を重ねていたのかどうか不安に感じる子どもの姿がより気になってきた。楽しく学習し、自己の成長が実感できる授業を求めて、「よさ」を生かした指導のあり方を、更に突き詰めていく必要性を感じている。そのためには、その子の「よさ」をどのように把握しようとするのかが大きな課題であり、「よさ」を把握しようとする自分自身の見方や考え方、感じ方のありようも問題となってきたのである。

そこで、事象に対するおのれ自身の見方や考え方、感じ方を見返したり、新たな認識のあり方を学びとったりすることを通して、「よさ」をより豊かに把握する感性を身につけようと考えた。このことが幅広くできればできるほど、一人一人の「よさ」の把握に深みが生まれ、多様な姿の子どもの姿を生かす授業ができるのではないかと。そして、こうした営みを続けることによって、楽しく学習し、自己の成長が実感できる授業や学校の姿につながっていくのではないかと考え「子どもの心によりそった指導」のあり方を再度求めて生きたいと考えた。

## 2. 1枚の地図から(私を見方を振り返って)

図1は、ある雑誌でみつけた地図である。この地図とによって私のもやもやがふっきれたような気がした。

この地図であるが、まさしく私に見方という面で、新たなヒントを与えてくれた。私自身中国史を勉強してきたが、東アジア世界をこのように見たことはなかった。新たな見方を教えてもらったという気持ちになった。私の意識では、日本と朝鮮半島とは近くにあり、中国の南（華南）とは距離的に遠く離れた場所にあるものといった見方（位置関係で）で日本列島とアジア大陸の関係を見ていた。そのため中国南部の少数民族の一部の風俗が日本と似ており何らかの関係があるのではないかとといった考えに対して、距離的な面から考えて無理があるのではないかと、単に偶然ではないかと疑いを持って見ていた。しかし、地図をこのように見ることにより、今までとは違った可能性にも気づくことができるのではないかとといった気持ちになった。歴史的な事柄だけにさまざまな見方・考え方があってもそれは許されるのだろう。しかし、現実起こっていることがらであってもその事実が事実として存在してもそれをどのように見るかということについては、やはり難しいこととなる。まさに、見方・考え方が問われるのではないかと考えるようになった。事実の見方については、その人の思想が問われるのだと思う。

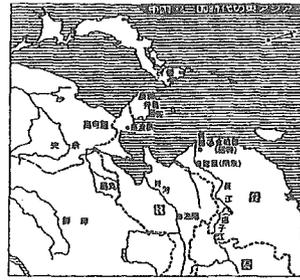


図1 中国三国時代の東アジア

社会科の時間はほとんど寝ているとあってよい生徒がいた。私は、その生徒にほとんど声かけをすることもなく授業を続けていた。他の生徒から「どうして注意しないの？」問いかけがあったが、わたしは逡巡し明確に答えることができなかった。彼女の寝るという行為をどう見るかということであった。

あいかわらず授業に集中せず、寝る姿が見られたが、寝ていないときはほとんど地図帳でいたがよく地図を眺めていることがあった。そこで、一度地名を中心にした授業をやってみた。するとどうだろう目を輝かせながら授業に取り組む様子が見えたのである。やはり、事実は確かめてみないと本当のところはわからないものである。しかし、瞬時の判断での指導が必要なきにはゆっくりもしていただろう。的確な見方が必要になってくるその見方の基準をどこにおくか甚だ難しいことである。

### 3. 考え方の発見（文献から）

#### 3.1 セアテック・ポール（全体をどう考えようとするか）

中学校社会科で、生徒の社会的事象に対する、見方や考え方を広めさせたり深めさせたりするためには、教師おのれ自身の、見方・考え方を豊かにしていく努力が必要なのだと思う。

社会科教育今後のあり方について提言した「社会科教育の21世紀—これからどうなる・どうする—」で、星村（1985）は、東南アジアの文化から学ぶものとして、次の言葉

を引用している。「従来の欧米の社会科学の観点というものは完全に外から見る観点であり、それはそれで精緻なものですが…、セオリーとじっさいとのギャップがある。いちばん大きいのは、東南アジアの人びとの考えている世界観なり宇宙観というものと、学者が外から見てそれを把握する場合の理解の仕方とに、ひじょうに大きなズレがあったと思うのです。（青木、1983）」

そして、東南アジアについて、この地域性を語ろうと、東南アジアの歴史を図2のようなセアテック・ポール（矢野、1984）の「東南アジア世界の構図」から引用、「Seatic Pole, Sea」の部分に South-East Asia の意味がこめられているという」のように表し、各部分を検討していこうと試みている。

各部分の検討については、内側からの視点の大切さや西欧の概念からの脱却、客観主義からの相互作用的认识への転換など、社会科における異文化理解の方法を述べ、更に、「自己認識（自国認識も含めて、これをどうするかも問題）を確立し、その上で相互主体的に対象に迫ることが大切である。」と教育の国際化にも繋がる考え方を示している（星村、1985）。このセアテック・ポールという考え方は私たち人間個人を見ていくときにも応用できるのではないかと考える。成長の姿が円錐形であるのか、その逆の形であるのかも論議の余地はあろうが子どもの姿や、自分の姿（歴史）をこのように考えようとするときに、なぜか考え方が広がってくるような気もする。また、東南アジアを考える方法として自己認識の重要性も語られているが、驚いたことに教育研究についても同じような認識のあり方（見方や考え方）が提案されている。

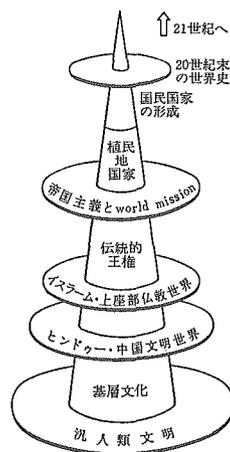


図2 セアテック・ポール

河合（1992）は、教育の科学性について、「教育においても、『科学的』というときに、すぐに近代科学の方法論によって人間が人間を『操作する』方法で、便利で効率のよい教育をしようとし、それによって、人間関係がギスギスしてくるということが生じていないかを反省する必要がある。近代科学の方法は、まず観察者と現象を『切断』することを前提としているので、そこからは『関係性』というものが失われる。人間が物に対してそれを操作するときにはそれでいいだろうが、人間が人間に対するとき『関係性』の失われたところで、どういうことが行なわれるのであろうか。『科学的』に研究する対象としては、いつも生徒が選ばれ、生徒をどのように操作すれば効果的結果を生むかを考えようとしていたのではなかつたらうか。もし、これがある程度成功したとしても、本来の教育の意義に照らして考えると、それに対しては疑問も生じてくるのではなかつたらうか。…（略）…『関係性』を考えつつ研究しようとするならば、研究する側の人間の在り方についても、相当に考える必要が生じてくるはずである。」筆者は続いて従来の研究方法（ハードな研究）

の意義を認めながら、人間関係の存在を前提として出発する研究（ソフトな研究）を提唱しつつ、「観察者となる人間はどのようなであり、人間関係の在り方はどのようなかなどを、できるだけ対象化する目を持ちつつ、研究者は人間関係を『切断』するよりも、むしろ、それに積極的にかかわりながら、教育という現象を記述することを心がけるのである。」と結論づけている。

認識主体と対象との交流、相互主体的、相互作用的认识といっても、関係性の中であっても、自らが対象の中に入っていくことが重要であり、自分をどう認識していくかが、考え方を練る上で大きな意味を持つものだと考えられる。事実の理解は見る人の関心の持ち方ひいてはその人の人間観によって、深まりや広まりに大きな違いが生じてくることを心したいと思う。

### 3.2 臨床教育

和田（1993）は、臨床心理学と教育学を統合した新しい実践的教育学、すなわち「臨床教育学」を提唱し、いま教育の世界でかかえている幾多の問題に処する考え方をのべている。そして、こうした視点に立った研修を進めて行くことの大切さも述べている。教師は、指導や相談を行う上で、今までの科学的な考えばかりでなく、子ども一人一人に目を向け、「全人格的な成長」という観点から子どもの直面している困難の理解と指導を考えるとという面での力量をつける必要性を強調している。

「事件があるたびに、（子どもとの）関係が深くなる。」「子どもをとかく一点で見ってしまう私たちであるが、自立の過程という線の中で見ていくことが大切ではないか。」軽井沢町の社会福祉法人・興望館「沓掛学荘」の野原館長先生のお話である。様々な要因で自立が阻まれている子どもたちを、まさしく丸抱えで、しかも成長の線上において見守っていかうとする姿勢である。この施設に措置された子どもたちの多くは、無断外泊などの問題行動を起し、職員の手を煩わすことがある。しかし、職員は、それらのことがらに真摯に対処することによって本当に関係が深くなるという受け止めをされている。

問題行動や事件等は、我々の手を煩わすことであり、でき得れば無いに越したことはない。皆無のほうがのぞましい。当然それらに対する予防的な指導も必要となる。そうした中で、一旦事が生じた場合そのことがらに対してどういった姿勢で対処していくのが問題となる。「関係性が深まるのだ。」「点でなく、線でみる。」という立場にたつことは、子どもの全人格的な成長を心から信じきる姿ではないかと思う。

今の時代や状況が私自身に求めているものは、「多くの可能性を秘めた子ども」と歩む私自身のありようであり、それを求め続ける私の意志ではないだろうかと考えさせられている。

## 4. 「天下悉異相異質，故学是尊是」人と向き合って（私の感じ方）

### 4.1 一面的な思い込み

不登校問題について、その解決策が見いだせないだろうか、かつて不登校を経験された方々に、学校のこと、教師のこと、不登校であったときのおもいなどを尋ねようと考え

た。そして、そうしたことを尋ねる人が多ければ多いほど、「なにか解決策が見えてくるのではないか。」そして、このことこそ科学的に自分で納得できるものが出てくるだろう。そんな取り組みの中で、次のような言葉をいただいた。

…………… 突然のお尋ねに驚きましたが、趣旨をうかがってとてもうれしくおもいました。私が学校を嫌いになりかけた頃にこんな先生がいてくれたら、また違った人生があったかもしれない（悔やんでいるわけではないのですが）ふと思いました。でも、お尋ねに答え終えた時「なんでこんなこと聞くんだ！」とうらめしく思いました。というのは半分ぐらい答えた時、不登校をしていたあの頃の感情が私の中でいっぺんにあふれだして、とても苦しくなったからなんです。ふさがっていた傷を無理矢理にこじあけられた気がしたんです。……………

こちらの分析的な質問に誠実な姿で答えてくれた。しかし、私がよかれと考へ尋ねたことで彼女の古傷を一挙に開いてしまった。「心に寄りそう」といいながら、なんと傍観者の態度であろう。

教育の世界では、21世紀に向けて社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成が叫ばれ、その方針の一つとして、個性を生かす教育の充実が提起されている。私のこの取り組みから見えてきたことは、個性、つまり、「一人一人の姿」にどれだけ向き合ってきたのかということである。

不登校という現象に対して、その数を少なくしていく方途はどうあったらよいか、教師である私にとって切実ではある。しかし、不登校をそのような問題としてしか考へられなかった自分がそこにあつたように思える。不登校は、人間の自立と大きくかかわってくる問題であり、まさしく一人一人の自立を願う「教育」そのものへの問いかけではないだろうかと感ずるようになった。

自らの思い込みで、傲慢な仮説をたて、多くの人の心の傷に触れていた私の姿は、まさしく物事を一面的に見ようとしたり、一方的に結論をくだそうとしたりするではなかったかと思う。

#### 4.2 これで大丈夫と思ったのに（相談の中で）

不登校で苦しむ中2の男の子に出会った。相談もまず関係づくりが大切だとおもいから、多くを聞き出すことをせず、活動を中心に数回の相談をさせていただいた。相談には母親とともに来るのが常であつたが、ある時に本人だけで相談に来る予定が立てられた。この子の生活が夜型になっているそうであること。昼間はほとんど外に出れないでいること。こんなことから、「きっと来れないであろう。来れるはずがない。」「ここに一人で来れるようであれば、自立の第一歩が見られるはずだ。」そんなおもいが私の中にあつた。その当日、私は、「きっと来れないだろう。」と決め付けながら待っていた。時間になると、彼は明るい顔で玄関に立っていた。私の予想を覆して、彼は明るい表情を私に見せてくれたのである。その時私は、「これで大丈夫だ。一歩踏み出せた」との確信をもった。そして、卓球を中心に精一杯活動した。私は、彼のこのやる気に感動して時間のたつのも忘れてラ

ケットと球に熱中していた。汗びっしょりになり、相談時間を40分オーバーして、それでも明るい顔で玄関を後にしていった。「これで大丈夫だ。第一歩が踏み出せた。次回も必ずや来てくれる。そして、精一杯体を動かしていこう。」そんな安堵の気持ちをいただきながら、彼に出会えたことを嬉しく感じていた。そして、次回の相談への期待が大きくなるまで来ていた。

不登校という事実の深さ、苦しみの大きさを知ったのは、それから一週間後の相談の日であった。以下その時の相談記録である。

前回は、一人でも来れたのだから今日はきっと、明るい顔で出会えるだろうとの思いがあった。待っていると、彼の姿が窓越しに見えた。父親の運転する車から降りる姿がなんとなくぎこちなく感じた。玄関を入っても、いつものような明るい挨拶がなかった。顔は伏し目がちでなんとなく表情も硬い。涙ぐんでいるようにも思われた。母親は、「今日はなんとなく、気乗りがしていない。」と、彼の様子を話してくれた。いつものように卓球室に入る。ラケットを捜すそぶりをする。なんとなく嫌な気分でありながらも、もう腹を決めたのか、それとも、いつものように卓球をしなければならないと感じていたのか。「気乗りがしなければやらなくてもいいよ。」と、ソファーにすわることを勧め、互いにぎこちなく腰をおろした。「なにかをしなければ、いけないんだ。」というような、そんな彼の気分を感じながら話し掛けた。今日相談に来ることに気乗りがしなかったのは、「眠かったから。」だという。「眠かったら、このまま寝ていてもいいんだよ。」と言ったが、そのとおりにする様子も感じられなかった。私がかまわずに、話しかけてしまった。二学期がいつから始まったか承知していないこと。今日の気分では前回のように一人では来れないこと。夜は午前2時から3時くらいまで起きており、TVを見たり、ゲームをしたりしていること。夜はほとんど一人で、母親も兄弟も寝てしまっていること。等々を、私の問いに応ずる形で語ってくれた。およそ20分くらいの時間だったように思う。今日の姿は、私に最初の期待があっただけに残念に思えてならなかった。しかし、「何かをしなければならないんだ。」という思い込みが、私にもあったためか、じっくり休ませることもせず、「マレットゴルフをやろうか。」と外に連れ出してしまった。本人はまだやったことのないゲームに対して、恐る恐る取り組む様子が見られた。ボールが伸びすぎた草のために思うようにころがってくれない。要領がつかめていない彼は苦労していた。次第に慣れ、プレーもうまくできるようになった。私に遠慮しながらも、集中していく様子が見られた。また、ゲームの中で私に対して、プレーしやすいように気を遣おうとする雰囲気が見られるようになった。やはり、体を動かすことに熱中できるんだと感じた。暑い中汗をかきながら取り組んだ。時間になり、帰りは明るい顔で、弾んだ声の挨拶をし終了した。

「ここでは、何かをしなければならない。」こんな双方の思い込みがあったのだろう。彼は、ことによったらこのような思い込みの中でここまで育ってきていたのではなかろうか。相談のたびに感じられた私に対する思いやりや優しさ、心遣いのしぐさなど。このような

彼のよさが、今の立ちすくみ現象の根本にあるのかもしれない。そんな風にも感じている。

しかし、私がただ一度の事実から安易に結論をつけようとし、期待したことは見事にと  
いうよりも当然のこととして覆された。彼の心優しさゆえの苦しみや歯痒さを、相談の中  
で私がどれだけ感じていることができたのであろうか。帰りぎわの彼が、汗をふきふき私  
に見せてくれた明るい笑顔が、今の私にとっての救いとなっているが、彼の苦しみを感じ  
られる自分を作っていかなければならないことを痛感した。

「天下悉異相異質，故学是尊是」（テノカコゴトクイウイツ ユニコレマナビコノカクツブ）この言葉は、  
我が教育の先達に揮毫していただいたものである。私の部屋に掛けてあり、毎日眺めてい  
た。まさしく眺めていただけの私であった。私には容易には理解されないであろう苦しみ  
や悲しみ、触れてほしくないことを持っている人たちとの出会うことによって、この言葉  
の意味がようやく実感できたように思える。そして、私に揮毫して下さった先生の真のお  
もいに触れたような気もしている。私の感じ方のふくらみは、この言葉を根本に、多くの  
人との出会いの中で培われるのではないかと思っている。

## 5. 最後に

本文章は、私が平成5年に、長野県教育委員会主管の生徒指導専門研修において研修報  
告としたものを手直しさせていただいたものである。

子どもの心によりそった指導のあり方について、おのれ自身の見方や考え方、感じ方を  
それまでの実践や文献、相談事例から学びなおし、ものがたり風にあらわそうとしたもの  
であった。研修の結果として、私には、まだまだ、事実に対する思い過ごし、見落とし、  
押しつけ、無頓着さなど不十分な部分が多いこと、むしろ、今まで気づかずに無関心でい  
たこれらの部分に気づけるようになってきたのではなかったかと結論づけている。

研修以後の教員生活は、まさしく生徒指導を中心にすえた活動ではあったが、思い過ご  
しや見落としがあったように思えてならない。生徒指導の力をつけることは、「人間性を磨  
く」ことでもある、という言葉に胸に、子どもたちの事実に向き合っていきたいと考えて  
いる。

## 文献

星村平和，1985，社会科教育の21世紀—これからどうなる・どうする—（社会認識教育  
学会 編集代表 伊藤亮三），明治図書出版株式会社，東京都，pp.91-102

河合隼雄，1992，対話する人間，潮出版社，東京都，pp.235-243

信州大学教育学部附属長野中学校教育研究会 1989「平成元年度中学校教育研究会要項」

青木 保，1983，東南アジア研究の課題，矢野 暢編，東南アジア学への招待（下），日本  
放送出版協会，東京都，pp.185

矢野 暢，1984，東南アジア世界の構図，日本放送出版協会，東京都 pp.4

和田修二，1993，臨床教育学，信濃教育，第1277号，pp.4-13

（2005年4月30日 受付）